

後援会だより

No.19 平成21年 4月

目 次

医学部保健学科の現状ならびに大学院大学について	保健学科長	浅沼 義博	2
ご卒業を祝して	後援会会長	岡本 啓一	3
2008年の看護学専攻	看護学専攻主任	水沼 秀夫	4
理学療法学専攻の動向と臨床実習について	理学療法学専攻主任	進藤 伸一	5
作業療法学専攻2008	作業療法学専攻主任	大友 和夫	7
看護学専攻の臨床実習について	看護学専攻実習委員	伊藤登茂子	8
作業療法学専攻3期生の総合臨床実習を終えて	作業療法学専攻	津軽谷 恵	9
教育賞受賞によせて	看護学専攻准教授	村山志津子	11
平成19年度保健学科教育賞の受賞を受けて	理学療法学専攻助教	大澤論樹彦	12
学生からのメッセージ			
・3年間を振り返って	看護学専攻3年次	高橋 恵	13
・一年間を振り返って	看護学専攻1年次	坂口美穂子	14
・あっという間の4年間	理学療法学専攻4年次	毛利 謙一	14
・秋田の地で	理学療法学専攻1年次	瀬戸 新	15
・春、今思うこと	作業療法学専攻4年次	木村 佳奈	16
・1年を振り返って	作業療法学専攻1年次	今家 大輔	17
・医学部陸上部に入部して(学生表彰:優秀賞)	看護学専攻3年次	菅原 純子	18
・憧れの舞台、国体(学生表彰:優秀賞)	看護学専攻4年次	森谷麻衣子	19
・4年間の部活動を通じて(医学部長表彰)	看護学専攻4年次	佐藤 幸	20
サークル活動			
・将来への一つの道しるべとして			
秋田スポーツメディカルコンディショニング研究会代表	理学療法学専攻3年次	佐藤 拓	22
・ソフトボールサークル	看護学専攻3年次	吉田 智晴	23
ソフトボールサークル代表	作業療法学専攻3年次	藤原 宗史	24
・作業療法と園芸サークル			
園芸農業クラブsaryo代表	作業療法学専攻3年次	神馬 歩	24
・大きなことはできないかもしれないけれど			
区画活性課代表	作業療法学専攻3年次	工藤 俊輔	26
	学務委員長	兒玉 英也	27
学務委員会、この1年を振り返って	入試委員長		
保健学科入試雑感			
平成20年度「ファカルティデブロップメント Faculty Development, FD」の			
講演「障害と開発:国際協力の考え方—Think globally, act locally—」を企画して	理学療法学専攻	工藤 俊輔	28
	保健学科長	浅沼 義博	30
秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程の開設について			
新任教員紹介			31
平成20年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況			32
平成20年度日本学生支援機構奨学生数			32
平成20年度卒業生進路状況			33
平成20年度後援会決算書			34
平成21年度後援会予算書			35
平成21年度後援会役員・総代			36
大学の行事等(平成20年4月～平成21年3月)			37
後援会会則			38

た医学部としての社会的認知度を上げることにより、研究教育実績に~~_____~~れたからといって、医学部の学部教育が疎かになるということは決してないということです。「教育は国家百年の大計」との言葉を持ち出すまでも~~_____~~来医療従事者として国家・社会で存分に~~_____~~躍~~_____~~る~~_____~~材を~~_____~~成するためには、保健学科における学部教育こそ重要であると信じています。

さて、この大学院部局化に伴い、我々教員は、「医学部に所属して教育・研究をする」のではなく、「大学院医学系研究科に所属して研究・教育をする」こととなります。また、組織、規程等は、様々な程度に変更、修正が加えられました。ただし、ここで、後援会の

皆様にお伝えしたいことは、大学院部局化が疎かになるということは決してないということです。「教育は国家百年の大計」との言葉を持ち出すまでも~~_____~~来医療従事者として国家・社会で存分に~~_____~~躍~~_____~~る~~_____~~材を~~_____~~成するためには、保健学科における学部教育こそ重要であると信じています。

私共教員は、教育の質を十分に担保しつつ研究と社会貢献にも努力する所存ですので、後援会の皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



ご卒業を祝して

後援会会長

岡本 啓一

ご卒業を迎える皆様、おめでとうございます。そして卒業生の父母、ご家族の皆様、おめでとうございます。また在学中、学生が大変お世話になりました浅沼学科長はじめ、教官、職員の皆様には、私どもの息子、娘が、まさに親身になってご指導、ご支援賜りましたこと、後援会を代表して御礼申し上げます。

卒業生の皆さん、大学を巣立ち、いよいよ新社会人となるにあたり、二つのことをお話し申し上げます。

一つは、学校にはルールがあったように、実社会にも当然の如くルールがあります。そのルールの中で、皆さんが大きく変わるところは、お金を払って勉強する立場から、お金を頂いて働かせてもらうという立場に変わるこ

とだと思えます。今までは学校、教官が護ってくれたけれども、これからは社会人として個々の責任を負わなければならない。勉強するもしないも各自の勝手であったかもしれない。これからは最低限、頂くお金の分は働かなくてはならないということです。

二つは、私は企業経営者として、新入社員に対してこれから話すことを毎年お願いしています。それは、皆さんがもらう給料を払っているのは、会社でも、株主でも、社長でもありません。皆さんがもらうそのお給料は、お客様が払っているということをよく理解して、忘れないでください。ですから、一人一人のお客様をいかに大切かを考えて接客して欲しい、ということです。これを皆さんがこれから入る世界に当てはめると、自治体、医

療法人、病院、健康保険、介護保険とか様々な組織や仕組みが間に入っていますが、企業で働く人と全く同様、患者さんが払った税金、医療費、保険料が皆さんの給料になっているということを理解して忘れないでください。そして一人一人の患者さんがどんなに大切かということを中心に思い接していただきたいということです。

最後になりますが、教官の皆様をお願い申

し上げます。卒業生たちはいよいよこれから各自の職場に散りますが、まだまだ未熟でございませう。これからも色々な壁にぶつかったりすることでしょう。お忙しいこととは思いますが、今後も彼らの相談相手としてお力添えを賜りますようお願い申し上げ、挨拶とさせていただきます。

ご卒業おめでとうございます。



2008年の看護学専攻

看護学専攻主任

水 沼 秀 夫

この一年、特に年度後半は全世界が経済危機に直面して、日本社会も不況や非正規雇用の失業問題などの暗い話題一色に包まれた重苦しい一年でした。時代の転換点にさしかかっているようで、今後世界全体の仕組みが大きく変動し、それに伴って大学もその変動の波をかぶらざるを得ない状況に立たされることになるような感じがしています。

さて、看護学専攻のこの一年ですが、社会の暗い雰囲気とは異なり、特に大きな問題もなく、平穏に年度末を迎えようとしているところです。3月には保健学科としての第2期生76名が巣立っていきました。

国家試験受験では、看護師国家試験は惜しくも2名が涙をのみ、保健師国家試験では4名が不合格、助産師は全員合格という結果でした。昨年に比べるとやや残念な結果でしたが、まずまずといったところでしょうか。この原稿を書いている時点では、既に今年度の国家試験も済んで、結果を待っているところ

です。全員が合格できる朗報を期待していません。

卒業生の進路は、他大学大学院に2名、助産師課程に1名が進学し、就職は71名でした。就職の内訳は保健師として県内外に5名が、助産師として県外ですが4名が就職しました。昨年の保健師2名、助産師0名の就職と比べると、今年は進路が多彩になりました。このことは看護師以外の職種についたものが2名いたことからもうかがえます。看護学を学んだ人間が医療職以外の多様な場で活躍することは大変よいことだと思います。残りの60名が看護師として秋田県内外に就職しました。県内に残った卒業生は26名で、昨年と同様、秋田大学附属病院には22名という多数が採用され、看護師として出発しました。県外では東京を中心とする関東圏が目立ち、それ以外では東北大学附属病院4名、仙台厚生病院4名といったところが目立つ就職先でした。例年と同じく、県内外出身者を問わず、

自分の出身地に近いところを就職先に選ぶ人が多く、出身地以外で就職する人は関東地方にその場を求める傾向は変わらないようです。

一方、新入生の方は、今年も推薦入学Ⅱ、一般入試前期日程、一般入試後期日程により選抜が行われ定員通りの70名を迎え入れることが出来ました。入学者の出身地の内訳は45名が県内で、25名が岩手県や北海道をはじめとする県外でした。今年も3年次編入学試験において、10名の編入学生を迎えました。

2年目を迎えた大学院修士課程の看護学領域には11名の学生が入学しました。学部生からの直接の入学者はなく、いずれも現職の看護師などとして活躍している学生ばかりで、多彩な顔ぶれです。来年度からは博士課程が設置され、既に入学者も決定しています。これで保健学科は大学としてのフルセットの課程を備えることになり、3年後には学部から

大学院博士課程までの全学年の在籍生が揃い、一応の完成をみることになります。卒業生、在学生の皆さんには、生涯のキャリアプランを設計する中で、本学大学院の進学もキャリアアップの道の一つとして考えていただきたいと思っています。

最後に、教員の異動ですが、年度を挟んで2名の入れ替わりがありました。3代目の医療技術短期大学部部長、初代の保健学科を務められ、長年にわたり多大な貢献をしてくださった吉崎克明教授が定年を迎えて退任されました。改めて、吉崎先生の30数年に及ぶ秋田大学へのご尽力に感謝と敬意を表したいと思います。吉崎先生の後任には、医学科より百田芳春准教授が転任しました。また、糠塚亜紀子講師が退任し、代わりに保田ひとみ講師が加わりました。そして、12月には三戸真由美助教が退職されました。



理学療法学専攻の動向と臨床実習について

理学療法学専攻主任

進藤 伸一

現在、専攻主任と臨床実習担当を兼任していますので、理学療法学専攻の動向と臨床実習について、まとめてご報告させていただきます。

1. 理学療法学専攻の動向について

今年度いちばんのニュースは、何といても医療短大開設時から整形外科と運動学を担当してこられた稲場斉教授が、この3月で定年退職されることでしょうか。先生のユニ-

クな経歴と人柄、大量のスライドを使った授業と妥協を許さない試験、症例報告会などでの医師の立場からの適切なコメントなど、学生たちが常に注目してきた先生のお一人でした。もう1つは、大学院1期生の5名の理学療法士に、修士（保健学）の学位が授与されることでしょうか。先日、公開の論文審査最終試験が行われましたが、それぞれが質の高い研究報告をしていました。学部卒業生とは違った形で今後の活躍が期待されます。

それから、ちょっと変わったニュースでは、1年生の専門科目「理学療法学概論Ⅰ」の授業のようすが、秋田放送テレビで放送されたことです。この科目では毎年、障害のある方をゲストにお招きして、理学療法士をめざす学生たちに1コマ講義してもらっていました。その情報を放送局がどこから聞いたのか、取材の申込みがあったのです。番組では、講義や質疑のようすが、介助を受けながら学生たちといっしょに食事をするようすが、そして何人かの学生へのインタビューが放送されました。「障害のある人は弱い人かと思っていたら、実際はとても強い人だとわかった」、「食事の介助をもっとじょうずになりたいのでボランティアをやりたい」などの学生の声も紹介されました。

次に学部学生の様子です。保健学科3期生の4年生17名は、臨床実習を終え、卒業研究も終えて、いま国家試験に向けて猛勉強中です。模擬試験受験料を後援会から一部補助していただくことになって、大変助かっています。大学院進学は2名、就職も希望するところにそれぞれ決まりました。3年生17名は、最初の本格的な臨床実習（4週間）が終わり、ホッとしているところです。4月からは8週間の臨床実習を2施設で経験し、大きく成長して帰ってくることでしょう。2年生20名は、専門科目の勉強に悲鳴を上げながらも必死に取り組んでいます。1年20名は、男11名、女9名、県内5名、県外15名で、全国各地から個性的な学生の集まったクラスです。暖かいところから来た学生にとっては、初めての秋田の冬は厳しく感じたかもしれません。

教員の業績（2007年）では、著書8、論文37、国際学会発表10、国内学会発表他26、そして講演などの社会的活動は64ありました。専攻として教育、研究、社会貢献など、バランスの取れた業績を挙げられるような運営に

心がけました。

2. 臨床実習について

臨床実習については、昨年カリキュラムを改正しましたので、今年の1年生から見学を中心とした1週間の臨床実習が始まります。1週間とはいえ、白衣を着て理学療法室にいただけで、理学療法士になろうとする意欲がいやでも高まるでしょう。実習前のオリエンテーションでは、まずはスタッフや患者さんとのコミュニケーションが大切だと励ましたところでした。この学年から、学年進行にともなって新しい実習システムに移行していきます。

昨年は、カリキュラム改正の内容を中心にご報告をしましたので、今回は、臨床実習で学生たちがどんな体験をし、どんなことを学んでくるのか、実習が終わったばかりの3年生のレポートからいくつか紹介したいと思います。

「今回は4週間の実習であったが、慣れるまでかなり時間がかかった。1週目は環境に慣れること、2週目は関節可動域運動、筋力トレーニング、動作介助などにおける自分の身体の使い方に慣れること、3週目は患者さんを観察し自分の実習スタイルを創ることに毎日せいっぱいになっていた。4週目になってようやく、自分である程度満足できるような実習ができた気がする。ふり返ってみると、最初に比べ4週間を経た今の自分は、かなり成長したと思う」と述べた後、「治療を行う上で大事なのは、あくまでも患者さんが主体であり、けっして治療者の押しつけになってはいけないということである」と書いています。4週間で「患者さんが主体」であることに気づいたのは、大きな成果だと思います。

「他部門の見学では、透析、検査、レントゲンなどを見学しました。すべて見たことがな

かったため、とても勉強になりました。手術見学では、リハビリテーションの対象としても多い、大腿骨頸部骨折後の人口骨頭置換術を間近で見学しました。電気メスで皮膚の焦げる臭いや、術中の出血には少しくラッとしましたが、準備や麻酔を含めた約3時間、集中が途切れることはありませんでした。とても貴重な体験をさせていただき嬉しかったです」と、ワクワクしながら実習に励んでいる様子が伝わってきます。

「コミュニケーションの重要性についても再認識することができました。単純に情報収集という意味でのコミュニケーションもありますが、患者さんとの信頼関係を築きあげていく上で欠かすことのできないものという意味での重要性を痛感しました」と書いている

学生もいます。県外学生にとって秋田弁を聞き取ることは大変ですが、一生懸命聞こうとする姿勢が逆に信頼されるきっかけになることもあり、人間的にも成長させてもらうことの多い臨床実習です。

こうした臨床実習は、実習施設、指導していただく理学療法士、そして何よりも患者さんの協力がなければできないものです。大学では、充実した臨床実習ができるように、担当者が日常的に実習施設と連絡を取り合い、協力して指導に当たっています。

以上、理学療法学専攻の動向と臨床実習について紹介してきましたが、後援会のみなさまには、今後ともご支援、ご協力をお願い申し上げます。



作業療法学専攻2008

作業療法学専攻主任任

大友 和 夫

アメリカの景気を牽引してきたと言われる住宅ブームの変調、いわゆるサブプライムローンの焦げ付きが、アメリカの自動車産業の傾きにとどまらず、我が国の多くの産業にまで波及し、多くの失業者を出してしまいました。さらに、全く考えてもいなかったのですが、多くの大学の学生の生活にまで及んでいます。今のところ、本学では大きな影響はまだ無いようですが、大変心配しております。

さて、長年の懸案でありました国家試験の合格発表が年度内に行われることが決まりました。3月末日と言うことなので、まだ本当に満足できる時期ではないのですが、少

しの前進だと思えます。本専攻の昨年度の国家試験合格率は、全国的に合格率が低い中で100%を達成致しました。今年度もこの伝統を引き継いで欲しいと願っております。

今年度は新入生が定員どおりの18名を迎えスタート致しました。県内出身者は例年より多めの12名でした。県外出身者は6名で、北海道が2名、4名は東北出身者でした。4年生3期生は、県内出身者が7名でしたが、県内施設への就職者は、他県出身者を含め7名で、他の県外出身者は、出身地あるいは近くの施設に内定しております。県内医療施設での医療従事者の不足は、未だ解決されてお

ません。医学科では、入学定員を増すことで解決しようとしていますが、どこまで解決できるか未知数のように思います。作業療法士についても同様で、県士会から入学定員の県内枠の設置などの要望がありますが、まだ方向は決まっていません。出来れば本学卒業生の県内施設への就職者が増えてもらえればと思いますが、現状ではどうすることも出来ないと言うのが本音です。

卒業生は、最も大変だった臨床実習も無事終了し、卒業論文の提出もつい先日すませ、国家試験の全員合格を目指し、グループ学習を軸に奮闘しているところです。

在校生も講義、演習、実習と毎日充実した大学生活を送っています。そんな中、これまでは、あまり見かけない行動がありました。3年生が中心になり、環境についての関心と、何とか毎日の生活の中で変化を持ちたいとの思いからの様ですが、夏の暑い時期に校舎周辺の環境を整備し、くつろげる場所を

つくりたいとの申し出があり、学科及び専攻で検討して許可したところ、暑いさなか数人の学生が中心になり、草を取り、区画整備をし、立派な庭をつくりあげました。完成の頃には木枯らしが吹き始め、十分に活用することは出来なかった様ですが、春からは十分に活用していけるものと思います。同時に作業療法学専攻が中心になり進めてきましたバリアフリー体験コースも設置され、春からは学生、教員はもちろんのこと、広く地域の人々の活用が期待されています。

21年度からは博士課程が設置されることが決まり、これまでの修士課程も名称が変わって、博士前期課程、そして新設の博士後期課程と一貫した課程となり、秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻としてスタートします。修士課程では、早いもので2年が経過して、修士号を取得する学生が先日、修士論文の最終審査が終了して作業療法分野でも4名の修士課程の修了生が誕生の予定です。



看護学専攻の臨地実習について

看護学専攻実習委員

伊藤 登茂子

緊張した面持ちの中に、眼を輝かせて志望動機を語る受験生。その多くが家族の入院の際に、あるいは1日看護体験を通して、看護がやりがいある仕事だと感じたことを話してくれます。そうした動機を強く意識しながら入学してもらえることは、頼もしくもあり、また教員としての責任を改めて感じるころでもあります。

看護学専攻で学んだ後に看護師や助産師と

して、いわゆる臨床に就職を決めた学生は、1期生67人(89.3%)、2期生65人(85.5%)でした。保健師はそれぞれ2人(2.7%)、6人(7.9%)でした。晴れて卒業し就職した時点で、果たして受験時に思い描いていた看護職と同等の仕事が出来ているかと問われるなら、残念ながらNOと言わざるを得ません。しかしながら、実践の科学として看護を学ぶうえで、理論を学び、学内演習や臨地実習を

とおして知識と技術とを統合するプロセスは繰り返して行われているところです。かつて患者さんから、何故卒業時点で一人前に働けないのかと厳しいご指摘を受けたことがありましたが、看護は単なる技術教育で成立するものではないから、と回答したように記憶しております。

看護基礎教育における臨地実習では、知識と技術とを統合し、加えて看護職となるのに相応しい考え方や態度を身につけることが重要となります。病院または地域で出会う人々や集団を「健康」という視点から理解し、より一層健康で生活できるように、苦痛があれば苦痛を緩和し、健康障害からの回復を促進し、慢性疾患にあっては疾患とともにより良い生活ができるよう支援し、さらに人生の終末期にあっては最期までその人らしく生を全うできるよう援助することを学びます。それらの学習は、秋田大学医学部附属病院をはじめ、実習協力病院、保育所、小児科クリニック、特別養護老人ホーム、福祉施設、社会復帰施設、保健所および市町村で行われ、多様です。また対象の年齢も新生児から老人まで幅広いです。実習によって多くの成果を得るには、知識や技術ばかりではなく、コミュニ

ケーション能力や社会性が必要となります。それは対象に対する温かで好意的な関心があるか否かで、随分変わってくるように思います。

そのような意味もあって、冒頭で看護にやりがいがありそうだと感じていることは、頼もしく感じると述べたところでした。

看護に対する興味・関心が、はじめは憧れであったとしても、学習を積み重ねることで体系的に知識・技術を学び、また、教養を深めることで自己と他者の理解が深まっていくならば、自ずと看護の理解も実践も実り多いものとなっていくと考えます。

学生の皆さんは、学年を経るごとに折々の言動や表情から成長がうかがえます。ことに実習前後での変化が大きいように思います。学生自身の努力によることは間違いないとしても、実習で関わる多くの方々のお蔭でもあり感謝しております。

実習が効果的に行えるよう、私ども教員も努力して参りますが、学生自身が心身ともに健やかに実習に臨めるよう、ご父母の皆さまにも、これまで同様のご支援・ご協力を、よろしくお願い申し上げます。



作業療法学専攻 3 期生の 総合臨床実習を終えて

作業療法学専攻
津軽谷 恵

今年度は、5月の連休明けから始まった4年生の総合臨床実習も様々な予期せぬことに見舞われ12月初めまでかかりましたが、作業療法学専攻の3期生19名全員が何とか3期18週間

の実習を終えることができました。

4年生で行う総合臨床実習では、県内外の臨床実習施設と臨床実習指導者のご協力を得て、身体障害領域、精神障害者領域、子ども

の発達障害領域、老年期障害領域、地域リハビリテーション領域における作業療法を実際に体験させていただき、作業療法で必要とされる知識や治療技術を学びました。実習各期終了後には報告会にて、各学生が担当させていただいた対象者の症例報告を行いました。報告会では、学生同士、教員との質疑応答や意見交換が行われ、期を追うごとに徐々に活発なやりとりが行われるようになっていき、実習での成長を実感したときでもありました。各実習施設では、知識や技術以外にも担当させていただいた対象者や他の患者さん・指導者・他職種職員等とどのように接したらよいのかというコミュニケーション能力も十分養われたと思います。はじめから上手な学生は問題ないですが、苦手な学生にとっては大変苦労したと思います。

実習が始まる前、始まってからも、正直すべての課題をこなして全員が実習を終えることができるか不安でしたが、3期の総合臨床実習を通して、身体的にも精神的にもたくましく成長できた学生をみると、発揮できる能力の幅に驚かされます。

3期生はほぼ全員が就職先を決定しており、その中の一人は、臨床現場で働きながら本学

の大学院修士課程への進学が決まっております。そして、国家試験は3月1日におこなわれ、卒業研究を1月初めに完成させてからこれまで毎日寝る間も惜しんで日夜受験勉強に励んできた成果が期待できそうです。保健学科がスタートしてから作業療法学専攻の国家試験の合格率が100%ということで、目に見えないプレッシャーと戦いながらがんばってきたと思いますが、3月31日の合格発表では学生・教員全員が笑顔になれることを願っております。4月からは社会人として、大学生生活で学んだ知識や技術を思う存分発揮し、全国で活躍できる作業療法士になってくれることを教員一同期待しております。

最後になりますが、1年次から4年次にわたっての臨床実習はそれぞれの到達目標や時期、期間は異なるとはいえ、本学における臨床教育に対する実習指導者及び施設のご理解とご協力により成り立っております。特に4年次の総合臨床実習では大学を長期間離れての実習になりますので、学生だけでなくご父兄の皆様にも様々な面でご心配とご負担をおかけすることもあるかと思いますが、ご理解とご協力をいただきたく、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



教育賞受賞によせて

秋田大学医学部保健学科

村山 志津子

臨床看護学実習に出ると毎回学生に聞かれることがあります。それは「なぜ臨床（病院）に戻らずに教員になったのですか？」という質問です。そんなとき私はきまってこう言います。「臨床が好きだから。」と。6年前私は、金沢大学大学院医学系研究科看護学専攻の2年生でした。それまで15年勤務した病院を退職し、臨床での疑問を解きたいと一念発起して学生に戻ったのです。その教室はどこよりも厳しいことで有名でしたが、私はどうしようもないくらいの劣等生でした。誰にも負けないことと言えば、課題が仕上がらなくて教室に泊まることになっても、パイプ椅子を3つ並べて落ちることなく熟眠できたことぐらいです。ある時、恩師は私を呼び出してこう言われました。『あなたは教員になりなさい。誰よりも臨床が好きだから、臨床で頑張ろうと夢を描く学生達にその楽しさを伝えなさい。』と。私は少し戸惑いを感じましたが、臨床の楽しさを伝えるのなら私にもできると看護教員の道を選んだのです。

平成16年秋田大学に就職して初めて教員という仕事に就いた私は、プリントの誤字脱字を学生から指摘されたり、脱線のあげく時間内に授業を終えることができなかつたりと、反省ばかりのおたんこナス教員でした。今でも未熟な授業に「穴が無ければ掘って（・・・）入りたい」と切望するときもあります。このような私が授業評価で一位となり教育賞をいただくことになりました。平成19年は「慢性期・終末期看護方法論」の授業

で、20年は「ターミナルケアとQOL」での受賞です。とても驚き光栄に思うとともに身が引き締まる思いをしています。ですが最近ほんの少し、人を育てることの楽しさ・嬉しさ、教員としてのやりがいも感じています。それは学生の中に人間としての成長を見つけたときです。私は授業中に意識して看護師時代の体験談を話すようにしています。それは臨床看護を知らない学生達に、より具体的に看護の仕事伝えるためですが、同時に看護師としての倫理感を養う機会になると思うからです。死にゆく患者さんのお話には、『いのちの尊厳や患者さんの痛みを考える機会となった。』『自分がやりたい看護をイメージできた。』と涙を浮かべながら言ってくれた学生がいました。このような“数値で測れない成長”に、私はたまらない喜びを感じるので。また励ましているつもりが励まされていることもあり、私自身も学生達からかけがえのないギフトをいただいているのだと思います。振り返ればいつでも人に恵まれて生きてこられた私は本当に幸せであったと思います。私に教員の道を勧めてくださった恩師、未熟な私を信頼という大きな愛で包み、叱咤激励しながら行く先を示してくださった秋田大学の先生方に感謝の気持ちで一杯です。教育賞は、教員6年目の私への「応援賞」であると受け止め、今後も驕ることなく研鑽を積んでいきたいと思っています。



平成20年度保健学科教育賞の受賞を受けて

保健学科理学療法学専攻

大澤 諭樹彦

教員になり10年目を迎えた節目の年に保健学科教育賞を受賞できたことは、大変嬉しく光栄に思います。同時に、今後もさらに質の高い教育を実践していけるよう努力していくことが必要と身の引き締まる思いにもなります。

私自身の教員経験を振り返ると、秋田大学への赴任当初は初めての教育現場に戸惑うことが多く四苦八苦の連続でした。臨床での経験を活かしつつ、なにを、どうやって学生に伝えていくかが難しく、教育実践の中で試行錯誤を繰り返していました。教育方法を学ぶ機会としては、秋田大学の進めるFD（ファカルティ・デベロップメント：教員の能力開発を目的とする取り組み）によるワークショップやシンポジウムへの参加、教員間での教育方法に関する話し合いを挙げることができますが、なによりも学生自身からの授業へのフィードバックを重ねたことが有益だったと実感しています。

その一例としては、数年前から授業に取り入れた「コミュニケーションペーパー」があります。名前の通り、授業に関する私と学生間のコミュニケーション・ツールです。学生は毎授業後に授業内容に対する疑問点、理解できなかった点、授業構成への要望などを「コミュニケーションペーパー」へ書き提出します。そして、次回の授業開始時に私から返答を行いません。ちなみに、次回の授業時に質問や疑問点に答えることは、私が想像していた以上に学生からの評判が良く、授業へ積極

的に参加する動機付けにもなっているようです。この「コミュニケーションペーパー」の導入は、私と学生の授業到達度のズレを最小限に抑えること、学生の授業参加への意欲を引き出すことを目的に行なったのですが、加えて意外な視点からの質問内容は新たな「気づき」の機会になり、私自身の授業準備への取り組みを楽しませてくれます。

学生が授業で理解できなかった点を「コミュニケーションペーパー」の内容から拾い、次回の授業までに少しでも理解され易くなるような資料の準備をし、さらにその内容を次年度の授業準備に反映させていくことの繰り返しが、授業内容の改善に繋がってきたと思います。この作業は私が担当する科目の全てで実施しており、自分自身が授業に向き合う姿勢を律する意味も含めています。このように、毎回の授業で行なわれるコミュニケーションペーパーを用いた学生とのやり取りから授業資料に加筆修正が繰り返されてきていることから、授業内容は学生自身からのフィードバックによって磨かれてきたともいえましよう。

これまで多くの学生とともに学び合えた10年間のプロセスが、保健学科教育賞の受賞に繋がったと考えています。ですから今回の受賞を学生とともに喜び、そして今後も学生とともに学ぶ姿勢を崩さず、責任を持って教育に取り組んでいきたいと思っています。

学生からのメッセージ



3年間を振り返って

看護学専攻3年次

高橋 恵

早いもので大学に入学してから3年の月日が経とうとしている。春になり新入生を見るたび希望と不安の入り混じった心境でスタートした当時のことを思い出す。1年生の頃は手形・本道キャンパス両方での授業があり、自分で科目を選択していく作業に戸惑いもあったが、気づけばあっという間に1年が過ぎていた。また多様な価値観を持った人々との出会いは自分自身を成長させ、人としての幅を広げてくれるものであった。2年生になると本格的に専門分野の学習が始まり、看護の魅力を知ることとなる。テスト前には友人と必死で勉強したことも思い出す。今でもテストが近づく度に前々から準備しようと思うもののなかなか実行できず、一度ついてしまった習慣は簡単には変えられないとつくづく思う。3年生になると実習、グループワークなど忙しかったが、3年間で一番充実した時間を過ごすことが出来たと感じる。困難な場面も仲間や先生方に助けられ乗り越えることが出来た。

大学生活を振り返って特に印象に残っているのは病棟実習である。患者との関わりの中で自身の看護観も変化してきた。実習前は看護とは何かを提供することで不足を補うことだという思いが強かったが、実習後は、患者

の治癒力や闘病意欲が高まり、順調に回復するように働きかけることが看護の役割として重要であると思うようになった。また健康障害が患者や家族に与える影響や、その人らしく生きるとはどういうことなのかを真剣に考える機会となった。実習では患者や先生方、病棟看護師の方々から多くのことを学ばせていただいた。協力して下さった周りの方々への感謝の気持ちを忘れず、今までの学びを次の実習に活かしていきたい。一方、机上の学習はどちらかといえば、その場しのぎの学習であったと思う。実習に行くとそれを如実に感じた。患者に質問されたとき、学習したはずのことなのにうまく答えられなかったり、患者に起きている症状から病態をうまくつかめないことも多かったからである。

このことから今後社会に出て人の役に立つためには、テストに通るための学習ではなく自分で使える知識を蓄える学習が必要だと考える。また多くの物・人に接し感性を磨き、患者の持つ様々なニーズに応えられるようになりたい。

4年生になると就職活動や国家試験などがあり不安もあるが、自分で決めたことには責任を持ち、自分で選んだ道を進んでいきたいと思う。そして残りわずかとなった学生生活を全うできるよう努めたい。



一年間を振り返って

看護学専攻1年次

坂口 美穂子

大学生になってからの一年は、本当にあっという間でした。大学受験を終え秋田大学への入学が決まり、これからの出会いやいよいよ専門科目の勉強が始まることに、期待と不安を抱きました。

一年生の夏には、もう実習があります。私は自閉症の方が通われる『杉の木園』でお世話になりました。とまどっている私たちへの入所者の方の気遣いはとても嬉しく、しだいに一緒に楽しい時間を過ごせるようになりましたが、至らぬ点や、ほかにもっと違った接し方ができたのではと反省すべきところも多々ありました。また、コミュニケーションは言葉だけではなく、様子を見て空気を感じ察することや、ただ一緒にいることが大切で、難しいのだと実感しました。実習を通して、自発的に勉強をしたくさんの人と関わりあい

ながら人間性を豊かにしていきたいという思いが、強く残りました。

この一年を振り返ると、自由な時間が私の生活を占めていたように思います。その中で、部活動やアルバイトなどだけでなく勉強もしなければなりません。活動の範囲は自分で決める自由がありました。勉強や人間関係は、自分で狭めることも、広げることもできます。そして、成長していくチャンスは、大人の境界線は目に見えませんが、それらの中にかくさんあるのだと思います。

学校や部活動を通して出会った仲間や先輩方、生活の中で知り合った人たちは私の宝物です。今まで出会った人たちを大切にしながら、これからの思いを馳せ、大学生活を私の故郷となるように育ててゆきたいです。



あっという間の4年間

理学療法学専攻4年次

毛利 謙一

秋田大学での4年間の生活ももうすぐ終わりをむかえようとしている。時間が経つのは早く、不安と期待を胸に抱きながら秋田に来た4年前のことは今でもよく覚えている。自分の実家は雪があまり降らない地域であるた

め、最初受験で秋田に来た時はその雪の多さと寒さに驚いたものであった。そして、4年前の4月に今の仲間たちと出会った。北は北海道、南は沖縄までと普通出会うことはないような人たちと一緒にそれから勉強をしてい

くことになるのである。出会いとは不思議なものであり、すごいものであると感じた。

少し振り返ってみると入学してすぐのさしみ温泉での宿泊、先生方との飲み会やさまざまなイベントなど楽しく過ごした時間はたくさんあった。勉強面においては、1年生の授業は一般教養が主であり、週3で手形、週2で本道で講義を受けた。高校までとは異なり、必修科目以外はシラバスから自分の勉強したい講義を選択するというシステムであったため最初はとまどったが、中には選択してよかったと思える楽しい授業も多くあった。2年生からは手形での講義がなくなり、本格的な医学的、理学療法学の専門科目が始まった。2年生からは仲間たちとずっと一緒に勉強をする時間が増えたことで、それぞれの良い点や悪い点がよく見えるようになり、また、実習形式の授業では身体を動かしあってお互いに一生懸命練習をしたことで、より絆が深まったような気がする。

そして、一番勉強になり、大変であったのは臨床実習であった。長い期間の実習であり苦労もしたがとても楽しく勉強をすることができた。それまでの学校での勉強だけでは学ぶことができないことをたくさん学ぶことができたと思う。この長い実習を乗り切ることができたのは仲間たちや学校の先生方、実習先の先生方のお力添えはもちろんだが、何よりも実習でお世話になった患者さんのおかげであったと思う。そのご恩に応えるためにもこの実習で学んだことをこれからの理学療法士として臨床での仕事に生かしていきたいと思う。

最後に、今日までお世話になった学校の先生方や先輩方、後輩たち、実習でお世話になった実習先の先生方や患者さんに感謝を表したい。この4年間本当にありがとうございました。これからは理学療法士としてよろしくお願ひします。



秋 田 の 地 で

理学療法学専攻1年次

瀬 戸 新

時間がたつのは早いことで、私が地元長野を離れ、ここ秋田の地で大学生活を始めてすでに一年が経とうとしています。この一年を振り返るととても多くの出来事があり、その出来事一つ一つが私自身を成長させてくれました。人生初の一人暮らしや不安で仕方なかった入学式、学級委員長という大変な、しかしとてもやりがいのある役目、初年次ゼミ、夏期休業中の病院見学、クラスマッチ、おそ

らく人生最初で最後の解剖学実習など、数え切れないほどたくさんことができました。入学当初に比べると、とくに精神的な部分で成長したのではないかと思います。一日一日を過ごす中でそれを実感する瞬間があります。

一年を通じ、人間の生と死というものを様々な面から考えることができ、またそのことに理学療法はどのように向かい合うのかと

いうことも講義を通して学ぶことができました。後期からは人体構造学実習や理学療法評価学、生活環境学といった専門科目も増え、理学療法士の仕事やその意義についてもより具体的に学ぶことができました。理学療法学概論や生活環境学の講義では「理学療法とは、医師が治せなかった病気や障害のためのメスや薬だ。」や「理学療法とは生命に時間を与えるのではなく、時間に生命を与える職業だ。」などのたいへん心に残る言葉を聞くことができ、自分が目指すべき理学療法士像というものをほんやりと、しかし確実にとらえることができました。また、理学療法評価学の講義では、現場に出てから実際に使う技術や知識を学習することができ、理学療法士の仕事の奥深さや責任の重さ、チーム医療における理学療法士の立場・役割なども学ぶことができました。

まだまだ自分の目指している山の麓にも立

ててはいませんが、この一年間で学んだことをこれからの生活に活かし、新しい学習にも全力で取り組んでいきたいです。

このような有意義な時間を過ごすことができているのも全て、私を支えてくれている多くの人たちのおかげであると感じています。同じ専攻の仲間たちや頼りになる先輩方、経験豊富で尊敬できる教授方、さらに部活の仲間や先輩、地元のみんな、そしてもちろん家族も。改めて私の出会い運の良さに感謝すべきと思っています。

これから先、現場に出てから出会うことになる患者さん一人ひとりを肉体的だけでなく、精神的、社会的にもしっかりとサポートすることができ、少しでも私のエネルギーを分けることができるような理学療法士を目指していきたいと思います。このような未熟な私ですがどうぞこれからもよろしくお願いたします。



春、今思うこと

作業療法学専攻4年次

木村佳奈

雪が融けるとともに、地面からはふきのとう（秋田では『ばっけ』と言うらしい）やつくしが顔を出す時期となりました。昨年まではその姿を見ると春休みが来たなと思い、休みは何をしようかと胸を躍らせていましたが、今年は少し違った気持ちで春の訪れを感じています。

大学4年間は私にとっても大切なものをたくさん与えてくれました。ひとつは挑戦する心です。私は中学・高校と陸上部に所属し、毎

日練習に汗を流していました。大学に入ってから医学部陸上部に所属し、毎日のように手形のグラウンドで走りこんでいました。しかし、学年が上がるごとに勉強や実習と部活との両立が難しくなっていました。学生の性分は学業なので、どちらかを選ぶと考えると学業を選ぶのは当然のことと思います。ですが、かつてインターハイと大学進学を目指しながら日々頑張っていた高校時代のことをふと思い出し、「私には両方できる力がある、

好きなことを無理して制限しなくてもよいのではないか。」と考えるようになり、実習中もできる限り走り続けました。3年生の時はハーフマラソン、4年生ではフルマラソンに挑戦し、両方とも無事に完走することができました。ゴールした後は完走した人しか味わえないなんとも言えない達成感でいっぱいでした。走っているときはいつも「なんでこんな苦しいことを好んでしているのだろうか」とか「もうリタイヤしようかな。」と考えますが、そこで止めてしまうと自分に負けたようで非常に悔しい気持ちになります。自分自身は最強のライバルであり、自分に負けることほど悔しいことはありません。自分の能力の限界を知ることは大切なことですが、人は限界を決めてしまうとそこまですればよいと考え、努力を怠ってしまうものです。はじめから無理だと決め付けるのではなく、「どこまでできるかやってみる、だめだと思ったらそこで立ち止まって考えればよい。」と挑戦する心を持ち続け、いつまでも自分を磨いていきたいと思えます。

もうひとつは人との出会いです。クラスの仲間、先生方、部活の仲間、実習で出会った方々、秋田に来て多くの方々と出会いました。うれしいこと、悲しいこと、辛いこと、楽しいこと、いろいろなことを分かち合うことができました。私が出会った人一人でも欠けてしまったら、今の私はないのだと思います。人とふれあうということは人間にとっても重要なことであるとともに、非常に難しいことでもあります。たった一言で勇気付けられたり、傷つけてしまったりします。作業療法士は人を相手にする仕事です。自分が相手に与える影響や患者さんが抱える様々な感情を理解して、気持ちの面からも支えていけるような気持ちを大切に作る作業療法士になりたいと思えます。

最後に、大学に入って気づいた大切なものは家族の温かさです。近くにいると当たり前だと思っていたことでも、離れてみると気がつくことがたくさんありました。私をずっと支えてくれた家族には心から感謝しています。ありがとうございました。



1年を振り返って

作業療法学専攻1年

今 家 大 輔

秋田大学に入学して、あっという間に1年が過ぎようとしています。

秋田に来た当時は、友達ができるか心配でしたが下宿の友達がすぐにでき、大学生活のいいスタートをきることができました。専攻の全員に会ったのは秋田に来てから少し経った時でしたが、一緒に授業を受けるたびに仲

を深めていき、すぐにみんなと打ち解けていきました。ほとんどの授業を専攻の男子全員で受けました。授業に対して一緒にグチを言い合ったり、授業中ずっと話しをしたこともありました。このように独特な大学の授業を楽しんでいました。

中学、高校とやって来た楽器を吹きたく、

吹奏楽団と金管アンサンブルの団体に入りました。そこで、高校との個人のレベル差を感じましたが、それをきっかけに真面目に練習するようになった気がします。今まで、1年のうちで楽器を吹かなかった日が20日あればいいくらいで、大学でもなるべく毎日吹きたく、なにがあろうと楽器を吹きに行っていました。吹奏楽団では副指揮者になり、定期演奏会が初めての舞台となりました。中学から指揮はやっていましたが、自分で曲を最初からつくっていくことは今まで顧問がやっていたため、初めてになり大変でしたが慣れていくと楽しくなりました。この二つのサークルに入った最初の頃は勉強も楽だったため特に問題なく活動していたが、テストの時期になると苦しい思いをしました。12月には一般の団体を含めた演奏会が4つあり、さらにテストが多数あって、この1年の中で一番忙しかったと思います。しかし、専攻の友達やサークルの友達のおかげで乗り越える事ができました。専攻の中でのみんなと頑張ろうと言う雰囲気が救いになってくれました。

1年次の授業の中に人体構造学実習があり、その授業ではご遺体を自分たちで解剖するという内容でした。人間にメスを入れて解

剖する事にかなり戸惑いがあり、やりたくないと思っていましたが、実際に解剖してみると筋肉や神経、血管、骨など体の構造を実際に見ることができ、人間の神秘に触れられ、貴重ないい経験になりました。この授業を友達と一緒に乗り越える事によって友達との絆を深められたのではないかと思います。ご遺体の御恩を忘れず、これからの勉強に役立てていきたいと思っています。

この1年を振り返ってみると様々な出会いがあり、多くの経験をすることができました。北海道から秋田に来た理由に、文化の違い、北海道と他の場所の違いを知りたかったという事がありました。確かにものの考え方や街の雰囲気などは違っていました。基本的にはなにも変わってはいませんでした。大学には、地元の人だけでなく他の場所から来た人が多くいて様々な考え方にふれる事ができ、勉強になることが多くあります。作業療法などの専門知識を学ぶ為だけに大学へ来ているのではなく、そう言った人と人のかかわり合いから視野を広げ、これからの人生に役立ていくことに意義があるのだと思います。残りの3年間でさらに知識を得ていきたいと思っています。



医学部陸上部に入部して

看護学専攻3年次

菅原純子

この度は全日本医歯薬獣医大学対抗陸上競技選手権大会・走幅跳で優勝することができ、大変光栄と思うと同時に、応援して下さった皆さん、部員の皆さん、部活動を支えてく

ださっている方々に大変感謝しております。私にとっては久しぶりの大会出場であったため、大会に臨む思いは大きかったですし、この優勝はこれからの自信に繋がる特別なもの

となりました。

私は今年度より、保健学科看護学専攻に3年次編入いたしました。高校の陸上部を引退して以来、3年間陸上競技から離れておりましたが、部活動紹介の時に医学部陸上部を知り、もう一度競技に復帰したいという気持ちが強まったのと、部活の明るい雰囲気や部員の優しさに触れ、入部することを決めました。高校の時まで当たり前のように取り組んでいた練習でしたが、久しぶりにやってみるととても新鮮に感じられました。

走幅跳は、自己の記録を向上させるためにトレーニングの量を追求し、走力をつけていくことも避けて通れない条件ではありますが、それとともに技術を理解し、身体に動きを覚えさせていくことが重要であると感じております。3年間のブランクがあり、走力・技術力ともに落ちているところを、どこまで埋められるか不安なところもありました。しかし、高校の時とは違い、監督がいないため自分たちに合った練習メニューを考えて行ったり、部員ひとりひとりの陸上に対する情熱や向上心などが練習からひしひしと伝わってきて、それが良い刺激となり私自身も練習に励むことができました。今はまだ、高校の時の感覚

を取り戻すことに精いっぱいな段階です。現状に慢心せず、これからもさらに技術を研鑽し、自己の記録を伸ばしていきたいと思っています。

陸上競技は個人種目ですが、決して一人で競技をすることはできません。もちろん自分自身で練習を乗り越えていかなければならない時もありますが、共に支え合って部員一人ひとりの歯車がかみ合った時に大きな力が生まれ、それが個人に波及し、ひとつの結果に繋がっていくものだと感じております。医学部陸上部は大所帯な部活で、その分多くの価値観や様々な個性が混在しており、ひとつの大きな部活を動かすためには困難な部分もあるとは思いますが。しかし一人ひとりがこの部活が好きで、この部活を良くしたいという気持ちで繋がっており、それがこのような素晴らしい部活を作り出し、個人に良い影響を与えているのだと強く思います。私はこの1年間、部活の雰囲気に助けられたり、部員から力をもらってばかりでしたが、これからはこの部活の皆さんのために少しでも貢献できるように最後の1年間頑張っていきたいと思えます。



憧れの舞台、国体

看護学専攻4年次

森 谷 麻衣子

「秋田わか杉国体の選考会が行なわれる」という先輩の何気ない一言から、私は国民体育大会に出場するという目標を立てました。弓道を始めたのは高校の時でしたが、東北大

会はもちろん、インターハイにも国体にも出場したことはなく、「国体」というのは憧れの舞台でした。何度も何度も選考会が行なわれ、強化選手には選んでもらったものの、結

果は補欠。補欠として選手のサポートを精一杯しましたが、秋田わか杉国体に出場することはできず、とても悔しい思いをしました。

実際に国体を自分の目で見て、ますます国体へ出場したいという思いが強くなった私は、一生懸命練習に励みました。3年生は専門的な授業と、病院実習で忙しかったのですが、できる限り時間を作り、弓道場へ足を運びました。その練習が実を結んだのか、チャレンジ大分国体の選考会では「選手」に選んでもらうことができました。あまりの嬉しさに身体が震えましたが、同時に、4年生は4月から病院実習があるため、国体選手との両立ができるのだろうかという不安もありました。しかし、先生方や友達、家族は悩んでいる私の背中を押してくれました。その後押しをうけて、実習と国体選手との両立を決めました。月曜日から金曜日は病院実習、週末は合宿というとてもハードな日々でしたが、合宿はとても楽しく、行きたくないと思うことは一度もありませんでした。

8月の東北ブロック予選で優勝し、国体へ出場が決まったときは、夢が叶うという喜びでいっぱいになりました。10月、いよいよチャレンジ大分国体本番。憧れの舞台に立てるといふ喜びからわくわくして楽しいという気持ちが強く、ほとんど緊張することなく弓を引

くことができました。また、弓道歴が十年以上のチームメイトと監督から「好きにやっつていいよ」と声をかけてもらったおかげで、気負うことなくいつも通り自分の弓道ができたと思います。近的は惜しくも予選敗退でしたが、遠的では決勝トーナメントに進出しました。決勝トーナメントでも、チームメイトの言葉を思い出し、のびのびと弓を引くことができました。結果は、5位入賞。とても嬉しくて、みんなで抱き合っけて涙を流しながら喜びました。憧れの国体で弓を引くことができただけでなく、5位入賞という成績を残せて、本当に嬉しく思っています。春からは社会人になり、ますます忙しくなるとは思いますが、この経験を活かして、また国体という憧れの舞台にチャレンジしてみたいと思います。

最後になりましたが、このような成績を残せたのも、後押しをして応援してくださった先生方や友達、家族のおかげです。特に先生方には、実習中も私の体調を気にかけてくださり、激励の言葉をいただきました。また、秋田県弓道同連盟の先生方には、たくさんのご指導、ご支援をしていただきました。この場を借りて、応援してくださったみなさまに感謝いたします。本当にありがとうございました。



4年間の部活動を通じて

看護学専攻4年次

佐藤 幸

秋田大学に入学してから4年。入学当時は長いと思っていた大学生活も、あっという間

に過ぎ去り、この春卒業を迎えようとしています。この4年間の中で、授業、実習、部

活、友達との付き合いを通じて多くの経験をし、その度に様々な学びを得ることができました。特に、4年間続けてきた部活動では、学部長表彰という光栄な賞をいただくことができ、真に嬉しく感じています。

走ること、跳ぶことが好きで小学校の頃より陸上競技を続けており、大学でも迷わず陸上部に入部しました。入部当初は、高校までとは違い練習が毎日あるわけではないため、時折参加し、楽しんで走れば良いと考えていました。しかし、練習がない日でも自主練習をし、練習では自分自身に厳しい先輩たちの姿を見て刺激を受け、自分も本気で頑張ろうと思いました。先輩方の陸上に対する姿勢と私自身の経験から一番強く感じたことは、日々の努力と向上心を持ち続けることの重要性です。現状に満足してしまっただけでは、上を目指して努力をしようとはしません。努力をしなければ、成長することはできません。私自身、自分なりに頑張れたと感じた時は良い記録が出せましたし、逆に、練習不足だと感じた時は納得できる記録は出せませんでした。常に満足せず、人より多く走るなどの努力を積み重ねることが、結果として大会での入賞、自己ベストの更新に繋がるのだと改めて実感しました。

4年間の部活動を通じて、部活動以外のことも多く学びました。大学では、学生が主体となって活動するため、練習内容や合宿・大会などの予定を学生同士で話し合い決めなければなりません。陸上部では、幹部が部活の中心となり大よその内容を決めています。私自身も幹部として1年間その職務を務めさせていただきました。その中で、自分たちで運営することの難しさ、今までは他人に頼ってばかりだった自分の甘さに気が付きました。今もなお、未熟なために人に頼ってしまうことが多く、私自身の課題となっています。

そして、部活動で何より忘れてはならないのは仲間の存在です。4年間頑張ることができたのも、様々な学びを得られたのも、陸上部の仲間のおかげです。共に頑張る仲間として、時にライバルとして、一緒に厳しい練習に耐え、励まし合いながら走れたからこそ、4年間続けることができ、良い結果を残すことに繋がったと思っています。また、仲間と笑ったり、泣いたり、たくさんの経験をすることで多くの気づきができ、成長できたのではないかと思います。陸上部の部員に限らず、私を支えてくださった両親、友人たちには深く感謝しています。そして、この学びと支えてくれた人たちへの感謝の気持ちを忘れず、4月から社会人として頑張っていきたいと思う所存であります。

最後になりましたが、学部長表彰を与えてくださった、学部長、職員の方々、貴重な経験をさせていただき、真にありがとうございました。

サークル活動



将来への一つの道しるべとして

秋田スポーツメディカルコンディショニング研究会 代表

理学療法学専攻 3年次

佐藤 拓

理学療法士＝スポーツトレーナー。理学療法士に対して、こんなイメージをお持ちの方はいますか。実は、私も大学に入学するまでは、理学療法士になってトレーナーのような活動がしたい、自分がこれまでやってきた部活動に関わっていきたくて思っていました。しかし、理学療法士が働く場所で多いのは、医療・福祉機関です。では、スポーツの分野で理学療法士が活躍することはできないかという、それは違います。最近では障害予防の一環として秋田では甲子園予選のサポートをしたり、国外に目を向ければメジャーリーグやNBAなどで活躍している理学療法士もいて、スポーツ現場の中でチーム医療を支える1つの役割を担っています。

当専攻ではスポーツ障害理学療法に関する講義は、3年生になるまでありません。そこで、スポーツ理学療法に興味を持った学生が集まって作ったのが、この秋田スポーツメディカルコンディショニング研究会です。活動内容としては、主にテーピングの練習や会員が参加した研修会のフィードバック、夏の甲子園予選のサポートの体験などを行ってきました。また、同じ興味を持った人たちとの情報交換や、近隣の病院を訪問し、実際にスポーツ理学療法に関わっている理学療法士の方々

から講義をしていただくこともあります。

理学療法士が活躍する分野は、年々広がりを見せていると思います。私はこの研究会での活動を通して、スポーツ障害理学療法について知ることはもちろん、自分が将来どんな理学療法士になりたいのかという道しるべとして、1つの指針になればよいと考えています。この活動を通して、スポーツ障害理学療法に興味を持った人たちが集まって、自分のいろいろな可能性に挑戦していただければ幸いです。

最後になりますが、サークル創設にあたってお世話になった顧問の大澤論樹彦先生や講義をいただいた理学療法士の方々、後援会の皆さまの協力があったからこそ活動を続けることができました。この場を借りてご協力いただいた皆様に感謝の意を述べたいと思います。



ソフトボールサークル

ソフトボールサークル 代表

看護学専攻3年次

吉田 智晴

先輩たちが立ち上げてくれたこのソフトボールサークルは、ソフトボール経験者から初心者までソフトボールに少しでも興味のある人なら誰でも大歓迎のサークルで、『キャッチボールがしたい…』『バッティングが好きで好きで仕方ない』などちょっとでも体を動かしたいひとには最適のサークルです。実際、私もキャッチボールがしたいという理由で入ったほどです。

さて、去年一年は主にキャッチボールを中心に活動を行いました。メンバーが比較的保健学科が多かったため、実習や試験期間などが始まると参加人数が激減することもあり、参加人数上キャッチボールしか行えなかったという面からということもありましたが、キャッチボールが大好きなメンバーが多いためでもあります。ですので、天気の良い日は張り切ってグラウンドに出かけ、張り切ってキャッチボールをおこない、張り切って青春を謳歌しました。ソフトボールサークルに所属しているメンバーは他の運動部と兼部している者もおおく、出し切れなかった体のなまりの鬱憤をソフトボールで発散していたりします。

また、ソフトボールサークルは外で活動しているため季節を感じながら運動することができるので、その季節ごとに違う空の下で活動することが楽しかったりします。春はぽかぽか陽気の中で、夏はまっすぐ照りつけてくる太陽の下で、秋は冬のおいを少しずつ感じながら、冬は秋田の豪雪ぶりを感じながら

…といった感じで。去年は参加人数やスケジュール等が調節できなかったため、練習試合等に行えませんでした。今後は参加人数増加を図り、練習試合等も行っていけたらと考えています。

現在は医学部三年生が中心となって活動していますが、このソフトボールサークルが季節感を感じながら運動不足を手軽に解消できるサークルとして年々続いていってくれることを期待しています。

最後になりますがこのように活動させていただけのも、後援会の皆さまや先生方のご支援のおかげです。本当にありがとうございます。今後も積極的に活動をし、勉強もともに頑張りたいと思いますのでどうぞよろしく願いいたします。



作業療法と園芸サークル

園芸農業クラブ saryo 代表

作業療法学専攻 3年次

藤原 宗史

2008年の夏は暑く、草を刈り、土を掘り、土砂を運び、ベンチを作り気づいたときには秋が過ぎ、冬となっていました。

作業療法において、園芸という活動は特に高齢者にとってなじみが深いアクティビティであり、臨床でも多く用いられているものの1つであります。しかし、作業療法の2年次で基礎作業学実習という講義があり、木工や陶芸をはじめとしたさまざまなアクティビティを学ぶ機会があるにも関わらず、園芸を学ぶ機会がありません。

秋田大学には専門家としてだけでなく、人間としても信頼することができる大変に優秀な先生方がおり、環境も整備されています。学ぶ環境としては恵まれている…。そんな中で、園芸を学ぶ機会がないこと、学ぶ場所がないことに僕たち3年生は疑問を持っていい

ました。「場所がないなら作ればいい。」そんな気持ちで僕たちは学校の裏に庭を作りはじめました。最初は、「途中で熱が冷めてしまうのではないか。」という心配もありましたが、サークルのメンバーをはじめ、多くの先生方や外部講師の方のご協力を得て何とか“庭”を形にすることができました。

この活動を通し、1つのものを作り上げることの大変さ、そして達成感を感じることができたのではないかと思います。僕たちは残念ながら、これから臨床実習で忙しくなり、本道キャンパスに来る機会も減ってしまいます。そこで、後輩たちにはぜひこの庭を維持・管理してもらい、この庭で園芸を行うことができるようになる日が来ることを願っています。



大きなことはできないかもしれないけれど

区画活性課 代表

作業療法学専攻 3年次

神馬 歩

大学生生活3年目、友達との会話ででた「いまさらだけど、なんか想像と違うよね。」という一言。「言われてみれば…。」日ごろからそう感じていたクラスの仲間たちと、大学生生活を変えていこうという目標をもとに誕生し

たのがこのサークル、区画活性課です。

しかし大学生生活も残り1年しかなく、本当にいまさら何をどうすればいいのか・何ができるというのか全くわかりませんでした。それでも何かやってみたいと思い、夏休みに

友達が始めたサークルと一緒に活動し、学生の憩いの場となるように庭づくりを始めました。レンガで道を装飾し、ベンチやウェルカムボードを作り、そして美術短期大学の菅原先生協力の下、庭の中心部に竹のオブジェを作りました。実際に活動1年目を終えた今でも、自分たちの大学生活が何か変わったという実感もありません。周りから見れば、自分たちの思い出づくりのためにやったのではないかと思われているかもしれません。しかし、何もしないでただ与えられる毎日を過ごす大学生活とは明らかに違う何かを感じることができました。自分が何か行動をすれば必ず周りに作用するということを実感したのです。たしかに環境に働きかけるということは難し

く、大きなことはできないかもしれませんが。しかし小さなことならできます。小さな区画であったとしても少しずつ活性化させていけばいつかは大きな変化になると信じて、これからは小さな活動を続けていこうと考えています。

次に考えている小さなことは「ペットボトルのキャップ集め」です。キャップは捨てればただのゴミで、燃やせばCO2にしかありません。しかし集めれば800個でワクチン1個になります。もし大学構内のすべてのゴミ箱でキャップを回収すれば…。考えてみてください。この文章を読んで何か感じた人、また今何か小さな考えを持っている人、私たちと一緒に少しずつ環境を変えていきませんか。



学務委員会、この1年を振り返って

学務委員長

工藤 俊輔

学務委員長を佐々木真紀子前委員長より引き継ぎあつという間に1年が過ぎようとしています。この1年を振り返り、保健学科の動向を紹介したいと思います。

(保健学科の動向)

保健学科では平成20年度の教育課程上の大きな動きとして

1) 大学院博士課程の設置
2) 修士課程第一期生の修了
3) 保健師助産師看護学校養成所指定規則改正による看護学専攻の教育カリキュラムの変更 がありました。1)については学科長の浅沼教授を中心に関係各位のご努力により、昨年、文部科学省より設置が認定され、初めての試験が今年1月に実施されました。この博士課程設立の目的は、①地域社会のニーズに応じて人々の健康と福祉の向上に資する研究を行うこと、②女性・小児発達支援科学分野では、女性と子どもの健康支援を視点とした援助理論の開発、ケア技術の開発、介入方法を開発できる高度な専門職者、高度な知識・技術を基盤とした研究者・教育者の育成、③高齢者生活機能支援科学分野では、高齢障害者の生活機能低下の予防と生活について研究し、特に呼吸循環器系リハビリテーション技術を開発できる高度な専門性とコミュニケーション能力を身につけた専門職者、研究者・教育者の育成 の3点です。今後、博士(保健学)課程の充実を目指した学務委員会の取り組みが必要となってきます。

2)については修士論文の最終審査会が本年2月に行われ、リハビリテーション科学領域

8名、看護学領域9名が公開審査を受けました。初めての審査会でもあり審査を受ける院生も緊張した面持ちで研究報告を行っておいりました。審査は研究デザインや研究結果、統計処理の妥当性等含め厳しい質疑もありましたが概ね無事審査を終了することができました。3)については看護学専攻を中心に大きな見直しを行い、特に地域実習の充実が図られました。このカリキュラムは平成21年度の新入生から適用されることとなります。

また、教員の側も毎年定期的に行われる同僚評価、自己評価を通じて卒業後、専門職として実践できる学生を育成するため各々の教授法の見直しを適宜行いながら教育の充実に努めています。また、成績評定平均値(グレードポイントアベレージ。以下「GPA」)の導入についての検討が話題となっています。このGPAというのは、公平性、透明性に優れた国際的に通用する基準であることや、また、「大学の社会的責任として、学生の卒業時における質の確保を図るため、教員は学生に対してあらかじめ各授業における学習目標や目標達成のための授業の方法及び計画とともに、成績評価基準を明示した上で、厳格な成績評価を実施すべきである。」という大学審議会の指摘を踏まえて行われているものです。秋田大学では教養基礎教育科目の成績評価で従来のA B C D評価の中にS評価を取り入れ、このGPA制度導入を行うことが決定しています。保健学科では実習の評価をどのように扱うのかが大きな課題です。

—学生の動向—

昨年度の一般選抜の入学試験の倍率は前期日程で看護学専攻が1.9倍、理学療法学専攻が2.3倍、作業療法学専攻が2.5倍、後期日程は看護学専攻が7.9倍、理学療法学専攻が7.5倍、作業療法学専攻が6.3倍でした。全体の倍率は昨年度と比較し今年度は減少していますがこれは秋田市内に4年制課程の日赤看護大学ができたこと（2009年4月開学）が影響しているようです。また、就職状況ですが各専攻とも進学者を除きほぼ全員医療機関を中心とした職場に就職できました。事故関係では自動車による自損事故で右大腿骨折、上腕骨折を生じた学生が1名、自転車で自動車に衝突し右鎖骨骨折を生じた学生が1名おりました。4月からは本道地区の駐車場はゲート化され、学内での学生の駐車は基本的に認められなくなります。今後自動車での通学は難しくなりますのでこれを機会に自動車による通学も見直すことも必要になるかもしれません。経済的な問題では授業料免除の許可者等については、以下のような状況でした。前期分申請者75名（16.3%）のうち全額免除2

名（2.6%）、半額免除68名（90.8%）、不許可5名（6.6%）、後期分は申請者79名（17.2%）のうち全額免除3名（3.7%）半額免除72名（91.1%）、不許可4名（5.2%）でした。全在生（459名）の18%近くの授業料免除申請があり、今後とも学生の経済的支援の充実を図っていきたくと思っています。なお、休学者は6名（0.8%）でした。各々諸事情がありますが早期に復学できるよう援助したいと思っています。また、学生生活のうれしいニュースのひとつとして医学部陸上競技部に所属する看護学専攻3年次菅原純子さんが第67回全日本医師薬獣医大会対抗陸上競技選手権大会走り幅跳びで優勝したことがあります。記録は5メートル11cmでした。学長表彰の候補者として大学に申請しています。今後益々の活躍を期待しています。4月からはデジタルキャンパス実現をモットーにWebメールによる新しい単位取得システムが稼働します。何か不明なことがありましたら保健学科係を通じて学務委員会に気軽にご相談下さい。今後とも皆様の益々のご支援、ご協力をお願い致します。



保健学科入試雑感

入試委員長

兒玉英也

暖かい春の日差しがようやく実感できるようになりました3月5日、原稿の締め切りを過ぎてしまって事務室の職員からの申し訳なきような「催促」のお言葉をいただきまして尻に火が付き、この文章をしたためております。私が、昨年4月より前任の石井良和教授

から入試委員長を引き継ぎまして、早いもので1年が経過しようとしております。委員長を体験して改めて感じるのが、入試の数の多いこと多いこと。学部の入試が推薦、前期、後期の3本立てなのは従来からですが、センター試験という大きな業務がその前に控えま

す。そして一昨年より修士課程の入試が加わり、今年度からは博士課程の入試も始まりました。そしておまけに、今年の修士の試験は定員割れとなってしまう、2次募集を行うこととなってしまうました。数えてみたら、1年の後半期に7回の入学試験があるのです。したがって、9月からは、毎月何かの入学試験をやっているという感じです。もう少し、整理できないのか（例えば修士課程と博士課程の試験をいっしょにやるとか）とも思いますが、それによる混乱も予測され、何か不祥事が起こったら大変なことになる入試ですから、ことは簡単ではありません。次から次へと押し寄せる入試の事務量は膨大で、入試関係の事務に関わる人々のエネルギーは甚大となり、本当に頭が下がります。この場を借りて、常日頃入試に尽力いただいている皆様に、心より御礼申し上げます。

さて、入試の動向でちょっと気になる現象が、看護学専攻での推薦、前期の志願者数が

若干減少傾向にあったことです。その背景として考えられるのが、日赤秋田看護大学が平成21年度に開学することで、より入りやすいほうに学生が流れて入るのではないかということが懸念されます。このことは、今後の動向を慎重に見定めていく必要がありますが、入試の形態も含めて我々もいろいろ考えるべき時期なのかもしれません。そして、看護師、理学療法士、作業療法士をめざす高校生の絶対数が底上げできるように、出張講義や説明会などのピーアールが以前にも増して重要になると考えます。

不況のトンネルはいまだに先が見えませんが、医療職は手堅い職業ということで、将来の職業として学生の選択するケースは増えるのではないのでしょうか。このような経済状態は、ひょっとすると我々にとっては追い風かもしれません。こんなプラス思考を心の片隅に潜ませまして、最後に残っております後期試験に臨みたいとおもいます。



平成20年度「ファカルティデブロップメント Faculty Development, FD」の講演「障害と開発：国際協力の考え方—Think globally, act locally—」を企画して

理学療法学専攻

工藤 俊輔

今回FDの講演をお願いした講師の久野研二氏は、日本理学療法士協会が1993年から98年までの5年間に亘り行ったインドネシア・ソロ・地域に根ざしたりハビリテーション(CBR)海外技術協力プロジェクトで一緒に活動したメンバーのひとりである。このプロジェクトは日本理学療法士協会が初めて行った大規模な国際協力活動で、第一次派遣として山本正義氏が、第二次は久野研二氏、第三

次は久野研二氏と小生、第四次は首藤奈保氏、第五次は、現在、本学助教を勤めている大澤論樹彦氏が参加している。また、本プロジェクトのための国内支援委員会が組織され、インドネシアからの研修生受け入れの体制を整え、五年間で14人の理学療法士・フィールドワーカーを日本に受け入れ研修を行い、さらに、派遣者以外にもCBRに関心のある者を募り、CBRスタディツアーを編成、15名のメ

ンバーが現地で実際の活動を見学している。

以上のような経過の中で、1998年、インドネシアのCBR活動の創始者であり、CBR開発・訓練センター施設長を勤めるハンドヨ博士をお招きし、博士からこのプロジェクトについての総括的な評価を行ったところ、極めて高い評価をいただいた。小生はプロジェクトに参加した当事者のひとりとして、国際交流という面では期待以上の成果と実績を上げることができたと思っている。

成功の理由として、ひとつは現地にハンドヨ博士という強力なキーパーソンを見つけ、博士の作った地域に根ざしたりハビリテーション(CBR)のシステムを利用できたこと。二つめは厳しい財政事情の中で国際医療技術交流財団が最後までこのプロジェクトの意義を理解し事業継続に力を尽くしてくれたこと。そして、6人の派遣者が日本理学療法士協会国際部や国内支援委員会の大きな協力を得ながら連携し、活動の継続性や一貫性を保つことに努力したことではないかと思う。小生自身もプロジェクト派遣終了後の翌年、10カ月間、インドネシア共和国におけるCBRの取り組みとその特徴について研究するため在外研究員(文部科学省)として、再度、CBR開発・訓練センターを訪れ、第四次派遣の首藤奈保氏、第五次派遣の大澤諭樹彦氏と、これまでの取り組みについて引き継ぎを行うことができ、本プロジェクトにおける活動の継続性を保つ役割を果たすことができた。

また、このプロジェクトに関わる報告として、小生は1996年ウジュンパンダンでのインドネシア理学療法学会(日本人としては初めて)、1999年の世界理学療法連盟学会、2000年、2002年のアジア理学療法学会で発表を行った。今回講師をお願いした久野研二氏はその後イギリスに留学し、開発学の研鑽に努めUniversity of East Angliaで博士(学術)

を取得し、現在、国際協力機構(JICA)、国際協力総合研修所の国際協力専門員の職に就いている。氏の活動範囲はエジプト、シリア等中東地域中心に、タジキスタン等も含め発展途上国の障害者問題のエキスパートとして活躍している。

今回の講演で久野研二氏からは障害を社会の問題として捉えることの重要性と障害の問題と社会開発の二つの側面から捉えるTwin-Track Approachについて最新の知見を紹介して頂いた。また、第五次派遣の大澤諭樹彦氏は本学に勤務しながらインドネシアのCBR開発・訓練センターを再々度訪問、CBRをテーマにこの3月に日本福祉大学で博士(開発学)を取得予定である。さらに、小生は2004年、タイ国立コーケン大学准教授Orawan女史をCBRの研究をテーマに秋田大学に招聘し、2005年度は大澤氏がタイ国立コーケン大学を訪問し同大学との交流を深めている。このように今回のFD講演会でインドネシア・ソロCBR海外技術協力プロジェクトから生まれた種(シーズ)の一端を紹介することができ有り難いことだと思う。

年度末の忙しい時期、ご出席頂いた教員・院生・学生諸子に心より感謝申し上げます。



秋田大学大学院医学系研究科 保健学専攻博士後期課程の開設について

保健学科長
浅沼 義博

本学では、平成21年4月より秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程を開設することとなりました。2年前の修士課程の開設に続いて、この博士後期課程の開設をご報告できることをうれしく思います。

I. 博士後期課程開設の必要性

近年の急激に進行する少子高齢社会の到来はさまざまな課題をもたらしていますが、特に秋田県においては、次世代を担う子どもを健やかに育てる体制作りと、健全な高齢社会を維持するための様々な医療制度の改革が求められています。従って、このような状況に対応できる優秀な人材と教育者・研究者の育成が強く望まれておりました。

この度、保健学専攻博士後期課程を設置したことで、博士前期課程(従来の修士課程)と博士後期課程がそろい一貫した高等教育ができることとなります。博士後期課程では、修士課程で修得した保健学に関する知識・研究基礎能力を深化させて創造性に富む研究を行う研究者、少子・高齢化に関わる諸課題に貢献できる人材、そして教育者の育成に務めます。

II. 博士後期課程の概要

専攻	分野	入学定員／収容定員	取得できる学位
保健学	女性・小児発達支援科学	3名／9名	博士（保健学）
	高齢者生活機能支援科学		

保健学専攻博士後期課程は女性・小児発達支援科学分野と高齢者生活機能支援科学分野から成ります。ともに地域社会のニーズに応じて人々の健康と福祉の向上に資する研究を行います。女性・小児発達支援科学分野では、女性と子どもの健康支援を視点とした援助理論の開発、ケア技術の開発、介入方法を開発できる高度な専門職者、高度な知識・技術を基盤とした研究者・教育者の育成をめざします。

高齢者生活機能支援科学分野では、高齢障害者の生活機能低下の予防と賦活について研究し、特に呼吸循環器系リハビリテーション技術を開発できる高度な専門性とコミュニケーション能力を身につけた専門職者、研究者・教育者の育成をめざします。

先日、平成21年度入学者選抜試験を実施し、4名の合格者が生まれました。内訳は、女性・小児発達支援科学分野2名、高齢者生活機能支援科学分野2名でした。博士後期課程の一期生として、精一杯努力して、3年後の修了そして学位の取得を完遂してくれることを願っています。

新任教員紹介



百田 芳春

保健学専攻 基礎看護学講座 健康科学分野

着任して間もなく1年になります。教育の世界ははじめてで、戸惑いや驚きの連続ですが、与えられた役割を自覚し、実直にのぞんで学生と信頼関係を築いていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。



保田 ひとみ

保健学専攻 母子看護学講座 母性看護学分野

母性看護学分野に着任し間もなく1年を迎えようとしています。教育では学生が出産や女性の健康について関心を持ち、お母様やお子様から多くのエネルギーをいただきながら学習に取り組んでいる姿に喜びを感じております。これからも、学生と喜びを分かち合いながら、共に母性看護学・助産学を探究していきたいと考えておりますので、皆様のご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年度秋田大学医学部保健学科入学試験実施状況

専攻	募集人員						志願者数					受験者数				
	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	
看護学	計	15	40	15	-	70	43	77	119	-	239	43	65	35	-	143
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	4 39	10 67	20 99	- -	34 205	4 39	10 55	9 26	- -	23 120
理学療法学	計	5	10	2	1	18	30	23	15	6	74	30	17	3	6	56
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	15 15	12 11	10 5	4 2	41 33	15 15	8 9	1 2	4 2	28 28
作業療法学	計	5	10	3	-	18	16	25	19	-	60	16	20	8	-	44
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	4 12	9 16	6 13	- -	19 41	4 12	8 12	1 7	- -	13 31
合計	計	25	60	20	1	106	89	125	153	6	373	89	102	46	6	243
	男 女	- -	- -	- -	- -	- -	23 66	31 94	36 117	4 2	94 279	23 66	26 76	11 35	4 2	64 179

専攻	合格者数						辞退者数					入学者数				
	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	推薦Ⅱ	前期	後期	社会人	合計	
看護学	計	16	42	17	-	75	0	3	2	-	5	16	39	15	-	70
	男 女	1 15	7 35	5 12	- -	13 62	0 0	0 3	0 2	- -	0 5	1 15	7 32	5 10	- -	13 57
理学療法学	計	5	10	2	1	18	0	0	0	0	0	5	10	2	1	18
	男 女	4 1	6 4	0 2	1 0	11 7	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	4 1	6 4	0 2	1 0	11 7
作業療法学	計	6	10	3	-	19	0	1	0	-	1	6	9	3	-	18
	男 女	1 5	4 6	0 3	- -	5 14	0 0	0 1	0 0	- -	0 1	1 5	4 5	0 3	- -	5 13
合計	計	27	62	22	1	112	0	4	2	0	6	27	58	20	1	106
	男 女	6 21	17 45	5 17	1 0	29 83	0 0	0 4	0 2	0 0	0 6	6 21	17 41	5 15	1 0	29 77

平成20年度日本学生支援機構奨学生数

区 分	人 数
第一種奨学生（無利息）	96名
第二種（きぼう21プラン）奨学生	119名

平成20年度卒業生進路状況

平成21年4月現在

専攻名	就職者数						進学者数						その他	合計
	県内		県外		計		県内		県外		計			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
看護学専攻	8	28	6	37	14	65	0	0	0	1	0	1	1	81
理学療法学専攻	4	1	6	4	10	5	2	0	0	1	2	1	1	17
作業療法学専攻	3	5	6	5	9	10	0	1	0	0	0	1	0	19
計	15	34	18	46	33	80	2	1	0	2	2	2	2	117

県内進学者は就職進学者で就職者数にも含まれている。

平成20年度秋田大学医学部保健学科後援会 決算書

収 入 額 5,527,951円

支 出 額 4,691,784円

差 引 残 額 836,167円 (次年度へ繰越)

収入の部

項 目	予 算 額	決 算 額	差引増△減	摘 要
前年度より繰越	1,238,792	1,238,792	0	
会 費	4,520,000	4,280,000	△ 240,000	@40,000×102名 @20,000×10名
預 金 利 息	4,000	2,949	△ 1,051	
雑 収 入	0	6,210	6,210	
計	5,762,792	5,527,951	△ 234,841	

支出の部

項 目	予 算 額	決 算 額	差引増△減	摘 要
学 部 協 力 費	300,000	390,000	90,000	臨床実習指導者連絡協議会, FD講演会, 教育賞 (H19, H20)
課外活動助成費	200,000	200,000	0	団体助成、学部長表彰
行 事 助 成 費	1,100,000	1,050,162	△ 49,838	新入生オリエンテーション, 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	300,000	300,000	0	@100,000×3専攻
会 議 費	150,000	153,153	3,153	総代会・理事会
広 報 活 動 費	600,000	178,800	△ 421,200	後援会だより (No.18)
臨地臨床実習費	400,000	400,000	0	実習指導経費, 車賃
国家試験対策経費	1,200,000	1,169,662	△ 30,338	国家試験(模擬)受験料, 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	1,000,000	793,255	△ 206,745	卒業祝賀会, 卒業記念品, 卒業記念集合写真
雑 費	50,000	5,017	△ 44,983	電報料, 切手代
予 備 費	462,792	51,735	△ 411,057	振込手数料
計	5,762,792	4,691,784	△ 1,071,008	

平成21年度秋田大学医学部保健学科後援会 予算書

収 入 額 5,279,167円

支 出 額 5,279,167円

差 引 残 額 0円

収入の部

項 目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘 要
前年度より繰越	1,238,792	836,167	△ 402,625	
会 費	4,520,000	4,440,000	△ 80,000	@40,000×106名 @20,000×10名
預 金 利 息	4,000	3,000	△ 1,000	
雑 収 入	0	0	0	
計	5,762,792	5,279,167	△ 483,625	

支出の部

項 目	前年度予算額	本年度予算額	前年度比	摘 要
学 部 協 力 費	300,000	350,000	50,000	臨床実習指導者連絡協議会, FD講演会, 教育賞
課外活動助成費	200,000	200,000	0	団体助成、学部長表彰
行 事 助 成 費	1,100,000	1,100,000	0	新入生オリエンテーション, 見学実習・解剖体火葬時バス代
施設見学謝礼	300,000	300,000	0	@100,000×3専攻
会 議 費	150,000	150,000	0	総代会・理事会
広 報 活 動 費	600,000	400,000	△ 200,000	後援会だより (No.19)
臨地臨床実習費	400,000	300,000	△ 100,000	実習指導経費, 車賃
国家試験対策経費	1,200,000	1,200,000	0	国家試験(模擬)受験料, 国家試験関係図書
卒業祝賀会経費	1,000,000	1,000,000	0	卒業祝賀会, 卒業記念品, 卒業記念集合写真
雑 費	50,000	50,000	0	電報料, 切手代
予 備 費	462,792	229,167	△ 233,625	振込手数料
計	5,762,792	5,279,167	△ 483,625	

平成21年度秋田大学医学部保健学科後援会役員・総代名簿

役職名	氏名	学 生	
		専攻	氏名
会 長	波多野 善 明	作業療法	花 奈
副 会 長	工 藤 郁 子	看 護	尚 也
〃	加 藤 公 一	理学療法	明 未
理 事	泉 敏 彦	看 護	怜 美
〃	三 浦 清 徳	看 護	彩 歌
〃	栗 林 直 弘	理学療法	由 佳
〃	小 森 和 彦	理学療法	直 樹
監 事	佐々木 弘 子	看 護	絵 理
〃	石 井 順 子	作業療法	信
総	4 年 次	(工 藤 郁 子)	
	〃	(佐々木 弘 子)	
	〃	(加 藤 公 一)	
	〃	(小 森 和 彦)	
	〃	(石 井 順 子)	
	3 年 次	(泉 敏 彦)	
	〃	(三 浦 清 徳)	
	〃	(栗 林 直 弘)	
	〃	(波多野 善 明)	
	代	2 年 次	佐々木 敏 昭
〃		船 木 秀 行	看 護 佳 秀
〃		照 井 俊 之	理学療法 佳 乃
〃		加賀美 圭 二	作業療法 開
1 年 次		石 黒 康 夫	看 護 なつ美
〃		中 道 博 之	看 護 望
〃		大 倉 忠 和	理学療法 和 貴
〃		久保田 政 昭	作業療法 遙

大学の行事等（平成20年4月～平成21年3月）

20. 4. 1 (火) 学年開始, 前期開始
 4. 4 (金) 2年次以上ガイダンス, 2年次以上健康診断
 4. 6 (日) 平成20年度入学式(秋田県民会館), 新入学生父母懇談会
 4. 6 (日) 新入学生ガイダンス
 4. 10 (木) 学生定期健康診断(新入学生)
 4. 15 (火) 第1回学科会議
 5. 20 (火) 第2回学科会議
 6. 1 (日) 秋田大学創立記念日
 6. 17 (火) 第3回学科会議
 7. 15 (火) 第4回学科会議
 8. 2 (土) 夏季休業開始(9月30日まで)
 8. 7 (木) 秋田大学オープンキャンパス
 8. 30 (土) 3年次編入学試験
 9. 6 (土) 大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)入学試験
 9. 16 (火) 第5回学科会議
 9. 19 (金) 3年次編入学試験合格者発表
 9. 19 (金) 大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)入学試験合格者発表
 9. 27 (土) 公開講座「健康と生活を考える
 —秋田でよりよく生きるために—」(10月18日まで)
 9. 30 (火) 前期終了
 10. 1 (水) 後期開始
 10. 21 (火) 第6回学科会議
 11. 18 (火) 第7回学科会議
 12. 6 (土) 大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)入学試験(第2次募集)
 12. 16 (火) 第8回学科会議
 12. 19 (金) 大学院医学系研究科保健学専攻(修士課程)入学試験(第2次募集)合格者
 発表
 12. 26 (金) 冬季休業開始(1月8日まで)
 12. 26 (金) 仕事納め
 21. 1. 5 (月) 仕事始め
 1. 20 (火) 第9回学科会議
 1. 17 (土) 大学入試センター試験(18日まで)
 1. 23 (金) 入学試験(推薦入学Ⅱ・社会人特別選抜)
 1. 24 (土) 大学院医学系研究科保健学専攻(博士後期課程)入学試験
 2. 6 (金) 大学院医学系研究科保健学専攻(博士後期課程)入学試験合格者発表
 2. 7 (土) 第10回学科会議
 2. 9 (月) 入学試験合格者発表(推薦入学Ⅱ・社会人特別選抜)
 2. 17 (火) 第11回学科会議
 2. 21 (土) 春季休業開始(4月3日まで)
 2. 25 (水) 入学試験(前期日程)
 3. 4 (水) 第12回学科会議
 3. 6 (金) 入学試験合格者発表(前期日程)
 3. 14 (土) 後援会総代会・理事会
 3. 12 (木) 入学試験(後期日程)
 3. 20 (金) 第13回学科会議
 3. 22 (日) 平成20年度卒業式(秋田県民会館)
 3. 22 (日) 入学試験合格者発表(後期日程)
 3. 31 (火) 後期終了, 学年終了

秋田大学医学部保健学科後援会会則

(目的及び事務所)

第1条 本会は秋田大学医学部保健学科（以下「保健学科」という。）の教育活動に協力・援助することを目的とし、事務所を本学部に置く。

(会 員)

第2条 本会は、保健学科に在学する学生の父母をもって組織する。

(事 業)

第3条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 保健学科整備に伴う諸事業の援助・後援
- 二 学生の教育活動の援助・後援
- 三 保健学科と家庭との連絡
- 四 その他本会の目的を達成するために必要な事業

(役 員)

第4条 本会に次の役員を置く。

- 一 会 長 1名 会を代表し、会務を総括する。
- 二 副会長 2名 会長を補佐し、会長不在のときその職務を代行する。
- 三 理 事 4名 理事会を構成し、事業の執行、運営に当たる。
- 四 監 事 2名 会計を監査する。

第5条 役員は総代会で選出し、任期は1年とする。

(総代会)

第6条 本会に総会に代わる組織として総代会を設ける。総代の選出は次のとおりとする。

- 一 総定員 16名（各学年4名ずつとする。）
- 二 総代は役員を兼ねることができる。

第7条 総代会は毎年1回開催し、次の事項を審議する。

- 一 予算の議決
- 二 決算の承認
- 三 事業の報告
- 四 役員を選出
- 五 その他必要事項

なお、必要に応じ臨時総代会及び総会を開催することがある。

(理事会)

第8条 本会の事業執行機関として理事会を置く。理事会は会長、副会長及び理事をもって構成し、総代会の議決事項の執行並びに会の運営に当たる。

(会の招集)

第9条 総代会（総会を含む。）及び理事会は会長がこれを招集し、その議長となる。会議は原則として出席会員をもってこれを開き、その過半数をもって議決する。ただし、必要やむを得ない事情のときは文書等によって意見を聴し、会議に代えることがある。

(職 員)

第10条 本会に次の職員を置く。

書記若干名 書記は総代会の承認を経て会長が委嘱し、庶務会計の事務に当たる。

(会 費)

第11条 本会の会費は、40,000円（3年次編入学生は20,000円）とし、原則として入会時に納入するものとする。納入した会費は返還しない。

(会計年度)

第12条 本会の会計年度は毎年4月に始まり翌年3月31日に終わる。

(補 則)

第13条 本会則の変更は総代会の議決によらなければならない。

附 則

- 1 この会則は平成2年4月12日から施行する。
- 2 第6条の規定にかかわらず、総代の数は、平成2年度は4名、平成3年度は8名とする。

附 則

- 1 この会則は平成14年12月20日から施行する。
- 2 第6条の規定にかかわらず、総代の数は、平成17年度までは12名とする。

附 則

この会則は平成17年2月1日から施行する。

後援会だより 通巻19号 2009. 4

発行 秋田市本道一丁目1の1
秋田大学医学部保健学科
後援会

☎ (018) 884-6505